

34	学校名 広島大学附属小学校	26～29
----	------------------	-------

平成 29 年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

E S D（持続可能な発展のための教育）の実践・普及の拠点であるユネスコスクールとして、大学、地域のステークホルダーと連携し、国内外における交流を図りながら、グローバルに活躍するために求められる資質・能力を育み、国際的視野をもつグローバル人材の育成を図ることを本研究の課題とする。

2 研究の概要

平成 25 年 4 月の中央教育審議会の答申において、我が国を取り巻く「危機的状況」の一つに、「グローバル化の進展」が掲げられており、「人・モノ・カネ・情報の流動化」、「知識基盤社会の本格的到来」、「新興国の台頭等による国際競争の激化」などが問題視されている。本研究では、このような「グローバル化」する社会に対応し得る教育内容、教育方法について明らかにすることを目的とする。

その準備として、本校は既にグローバル化に対応する教育の具体的な方略として、「小学校全学年を通じての英語科の実践」、「既存の教科におけるグローバル化に対応するための実践」を中心に実践研究を行い、新たな時代の教育の研究開発に着手している。今後はこれらを発展させた形のグローバル人材育成を検討する。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究仮説

「小学校全学年を通じての英語科の実践」、そして、グローバル化に対応した「既存の教科の指導の充実」により、グローバルに活躍するために求められる資質・能力を育むことで、学校教育におけるグローバル化に対応した人材育成が可能であるという仮説のもとで研究を進めている。

また、本校はユネスコスクールであり、持続可能な社会を先導する人材育成を目指している。そして、グローバル化に対応した人材は、E S D で育みたい資質・能力を兼ね備えているととらえている。そこで、グローバル化に対応するための指導と E S D で育みたい資質・能力の育成との関連についても検証を行うこととする。

（2）教育課程の特例

- ・小学校全学年における新教科「英語科」の実施
第 1 学年・・・年間 68 単位時間
第 2～6 学年・・・年間 70 単位時間
- ・低学年における社会科、理科の実施
第 1 学年・・・年間 68 単位時間、第 2 学年・・・年間 70 単位時間
- ・生活科の廃止

4 研究内容

（1）教育課程の内容

中央教育審議会（2005）は「新しい時代の義務教育を創造する」の中で、「我が国が、変化の激しいこれからの時代において、今後とも国際的な競争力を持つ活力ある国家として、また世界に貢献する品格ある文化国家として発展するためには、国民一人一人が、そのような国家・社会の形成者として、それぞれ

の分野で存分に活躍することのできる基盤を、義務教育を通じて培う必要がある」と指摘している。このことは、社会情勢に応じてグローバルに活躍できる人材を学校教育において育成することの必要性を示している。

グローバル化対応の人材育成において、コミュニケーションツールとしての英語教育の充実をあげるのは当然のことである。次に、本校のこれまでの教科教育の実践研究の成果を、グローバル化した社会に対応し得るか否かという視点でとらえ直し、教科の特性をいかしたグローバル化に対応し得る指導のあり方について明らかにすることを通した「既存の教科教育の指導の充実」が考えられる。この2つの取組を主として実践研究を行っていくことにより、グローバル化に対応した指導のあり方が明らかになると考えた。

では、学校教育におけるグローバル化に対応した人材育成は、どのように行われるべきだろうか。また、グローバル化に対応する人材として、どのような資質・能力を小学校段階で育成をしていくべきなのか。これらのことについて明らかにし、構造化していった。

① 学校教育におけるグローバル化に対応した人材育成

子どもたちが過ごしていく社会の状況は、グローバル化が進んでいる社会である。本研究ではグローバル化を、「情報通信技術の進展、交通手段の発達による移動の容易化、市場の国際的な解放等により、人、物、情報の国際的移動が活性化して、様々な分野で「国境」の意義があいまいになることで、共生と競争の両方が求められる社会の多面的な変化」と規定した。このような社会の状況で求められるグローバル人材とは、「主体的に物事を考え、多様なバックグラウンドをもつ友人、仕事仲間や仕事相手、地域住民等に対して自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場に立って理解し、そうした差異からそれぞれの考えを引き出して活用し相乗効果を生み出して、新しい価値観を生み出すことができる人」とした。

このようなグローバル化に対応した人材となるために、小学校段階で目指す子ども像を、次のように設定した(表1)。

(表1) グローバルリーダーを志向する子ども像

高学年	自ら学び 自他のレベルを向上させる リーダーとして活躍できる子ども
中学年	自ら学び 自他の相違を生かし 協働することができる子ども
低学年	自ら学び 自他の相違を認め つながりをつくることのできる子ども

高学年段階の「自ら学び自他のレベルを向上させるリーダーとして活躍できる子ども」を、将来グローバル人材となるために小学校段階の子どもの具体的な姿として目指した。主体的に物事を考え、異なる考えや価値観をもつ他者に対しても相手の立場に立って理解し、それを認め、差異を乗り越えて新たな価値を創り出し、問題を解決することができることを想定し、学校におけるグローバル化に対応した人材の育成を図っていった。

ここで言う「リーダー」とはグローバルリーダーのことで、共生と競争の両方が求められる社会の中で、自分や自分の所属する集団だけの幸福や利益を求めて行動するのではなく、全体の幸福や納得を求めて、他者と協働的に行動することができる人のことである。また、「リーダーとして活躍できる」ことを目指しているのは、リーダーでなければだめということではない。変化の激しいグローバル化社会においては、個々人が主体的にそして協働的に行動していくことが求められる。リーダーとして活躍すべきときに活躍できる力を、子どもたち一人一人につけていくということである。そして、リーダーとして活躍できる力をもった子どもは、リーダーとして行動する他者を支えることができる子どもでもあるという考えに基づいている。

② 育てたい資質・能力の設定

「自ら学び、自他のレベルを向上させるリーダーとして活躍できる子ども」という子ども像をもとに、グローバルに活躍するために育てたい資質・能力として次の3つを設定した。

- 生きるために必要となる知識・技能【知識・技能】

- 文脈に応じて全体を向上させる思考力・表現力【思考力・表現力】
 - アイデンティティをもち、異なる文化や価値観をもつ他者との共生を創る態度【共生を創る態度】
- これら3つの資質・能力は、各教科固有で育成する資質・能力と、教科の枠をこえて育成する資質・能力がある。以下に整理する。

【各教科固有で育成する資質・能力について】

子どもたちの3つの資質・能力を効果的に育成するために、表2で示したような各教科固有で育成する資質・能力を明らかにした(表2)。子どもたちが各教科において深い学びを達成し、各教科固有の3つの資質・能力を身に付けていくことをめざす。そのために、各教科が作成した本校独自のカリキュラムを見直している。

(表2) 各教科で育てる資質・能力

資質・能力 教科	生きるために必要となる 知識・技能	文脈に応じて全体を向上 させる思考力・表現力	アイデンティティをもち、異なる文化や価値 観をもつ他者との共生を創る態度
国語科	読書に関する知識・技能	読書を通じた思考力・判断力・ 表現力	主体的・積極的に読書に取り組み、読書を通 じて、情緒を育て、様々な人のなかに参入す る態度
社会科	グローバル化社会を解釈する ために必要な知識・技能	グローバルな変化に対する主 体的な思考力・判断力・表現力	グローバル化社会を構成する一員として、グ ローバル化社会に積極的にかかわる意欲や態 度
算数科	数量や図形についての知識・ 技能	数学的な思考力・表現力	協働的に算数を創る態度
理科	科学的知識・技能	科学的な思考力・表現力	自然の事物・現象にかかわる態度
音楽科	表現と鑑賞の基礎的・基本的 な知識・技能	知覚・感受したことをもとに音 楽表現を工夫する力、創作する 力、評価する力	音楽の感じ方や音楽に対する思いや意図に共 感する態度
造形科	材料や用具、技法についての 知識・技能	造形活動を通じた表現力・作品 を鑑賞する力	造形活動を通して、他者を思いやりながら積 極的にかかわる態度
体育科	運動についての知識・技能	運動についての思考力・判断力	共に学び合い、共に文化を共有し合う仲間と して他者を認め合い、結び合う態度
英語科	言語や文化に関する知識・技 能	英語を活用した思考力・表現力	英語を使ってコミュニケーションを図る態度

【教科の枠をこえて育成する資質・能力について】

教科の枠をこえて育成していく3つの資質・能力は、表3で示したように整理した(表3)。

(表3) 教科の枠をこえて育てる資質・能力

		低学年	中学年	高学年
資質・能力	資質・能力の要素	自ら学び 自他の相違を認め つながりをつくることができる子ども	自ら学び 自他の相違を生かし 協働することができる子ども	自ら学び 自他のレベルを向上させる リーダーとして活躍できる子ども
生きるために必要となる 知識・技能【知識・技能】	各教科における基礎 的・基本的な知識・技能	・各教科固有の知識・技能の獲得		
文脈に応じて全体を向上 させる思考力・表現力 【思考・表現】	問題 解決力	・課題の設定 ・情報の収集 ・整理・分析 ・まとめ・表現	・疑問をもつ ・選ぶ ・特徴に気付く ・感想・意見をもつ	・相違に気付く ・集める ・結びつけて考える ・考えをまとめる、整理する
	論理的思考力	・理由をもって考える	・根拠をもって考える	・事象から捉える ・探す ・背景を考える ・考えを吟味する
	批判的思考力	・受け入れる、認める	・判断する	・複数の根拠をもって考える ・代替案を考える
	反省的思考力	・自分の立場で考える	・相手の立場で考える	・全体的な視野で考える
アイデンティティをもち、異なる文化や価値観 をもつ他者との共生を創 る態度 【共生を創る態度】	アイデンティティ	・好きなことが言える ・家族や友達を見つめる	・よいところが言える ・地域や国を見つめる	・変容が言える ・国や世界を見つめる
	他者との協働 新たな価値観の創造	・自分のことを伝えながら、活動する ・人とのかかわりを大切にす意識を もつ	・相手のことを尊重しながら、 活動する ・自然や平和への畏敬をもつ ・多面的な考え方をもつ	・友好な関係をつくりながら、 活動する ・グローバルな志向をもつ

例えば、第6学年の社会科や理科では高学年で論理的思考力の「複数の根拠をもって考える」の資質・能力を育成するために、「複数の具体的な事象を根拠にして、価値判断したり、意志決定したりする」という論理的思考力育成に重点を置き、授業実践を行った。両教科とも、「水」をテーマに授業開発をした。

社会科では、「水紛争は、なぜ起きるのか」という課題のもと、水利権、水の循環性、水資源開発の主体といった視点から、水紛争の原因について認識していった。水紛争の理由について、様々な資料を根拠にして考えたのち、水資源開発の在り方について迫っていった。理科では、液体の正体を探るため、複数の実験を繰り返し、複数の実験結果から液体の正体について明らかにしていくという学習を行った。このように教科の枠をこえて「複数の根拠をもって考える」といった資質・能力の育成を試みた。

以上のことを踏まえ、本年度も各教科（国語科、社会科、算数科、理科、音楽科、造形科、体育科、英語科）で研究授業を実施し、教科の枠をこえた資質・能力の育成につとめている。

③ 小学校全学年を通じての「英語科」の実践

本校では英語を教科として第1学年から導入し、英語を通じて、ことばや文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、「聞くこと」「読むこと」「やりとり」「発表」「書くこと」などの英語コミュニケーション能力の基盤を養うことを目標としている。この目標を達成するために、以下の三つの視点から単元を構成し、カリキュラムを作成している。

- ・ **Communication : Core**（英語の音声やリズムを習得し、英語コミュニケーションの基礎を学んだり、基本表現を使って言語活動を行いながら英語表現を増やして使ったりする単元）
- ・ **Communication : CLIL**（他教科・領域での既習内容や学校行事について英語を通して学ぶことによって思考力・表現力を育成する単元）
- ・ **Communication : Active**（eラーニングシステムや帯活動において、子どもが各自でパフォーマンス課題を設定し、それに向かって個人で技能を高める単元）

④ 小学校第1学年からの「社会科」の実践

グローバル化により社会構造は、ますます多様化、複雑化している。そのような中では、低学年のうちから自分のことだけではなく社会にも目を向けさせることが必要になってきているのではないかと考える。1・2年生にも、自分以外の存在が見えるようにしていくのが低学年社会科の役割だと考える。低学年社会科を実施することで、1・2年生なりの社会的な見方や考え方をつけていき、社会形成力の育成を目指したい。

また、グローバル化社会だからこそ、家庭・学校・地域といった、学習対象の枠を外し、低学年のうちからグローバルな視野で「家庭→学校→地域→日本→世界」の一方向だけではなく、「世界→日本→地域→学校→家庭」といった双方向で学習を展開する必要があると考える。この双方向での学習では、多文化社会、複文化社会が自分、家庭、学校、地域社会にもあることの理解を進めることができる。この理解を進めることは、低学年にとっては重要である。また、低学年のうちから外国の社会事象を学習したり、外国との違いを比較したりすることで、我が国への愛情を深めるとともに、異文化を理解することも可能ではないだろうか。

社会科では、グローバル化社会に対応するためにより一層社会形成力を育成させるという理由から、第1・2学年の社会科を実施した。

⑤ 小学校第1学年からの「理科」の実践

グローバル化により、人や物、そして情報がこれまで以上に活発に行き来している。自然事象についても、地球規模で考えなければならない問題も生じている。そのような中では、科学的リテラシーの育成をより一層充実させるために、直覚的に自然の事物・現象をとらえることができる低学年期において、科学遊び文化や栽培・飼育といった体験活動の中で、積極的に観察経験を積み、観察力の低下を防ぎ、自然の事物・現象についてスパイラルなカリキュラムの中で取り扱うことが必要なのではないかと考える。1・2年生が自然の事物・現象について相違点と共通点をとらえる観察活動をしていくことが低学年理科の役割だと考える。低学年理科を実施することで、発達の特性に即した1・2年生なりの科学的な見方や考え方をつけていき、科学的リテラシーの育成を目指した。

また、グローバル化社会だからこそ、科学が人類共通の文化であり、自然を説明するための一つの様式であるという世界の潮流に見合った科学観の育成を目指す学習を展開する必要があると考える。この学習では、「科学についての知識 (knowledge about science)」とも表現できる「科学の本質」に関する理

解を進めることができる。この理解を進めることは、低学年を含めた6年間の小学校理科の学習において今後重要になってくる。

理科では、グローバル社会に対応するためにより一層科学的リテラシーを育成させ、新たな科学観を反映した「科学の本質」の育成を図るという理由から第1・2学年の理科を実施した。

(2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<p>主たるテーマはグローバル化が進む中で、それに対応し得る人材育成について研究をしていくことであり、英語教育の充実はもちろんのこととして、小学校教育全体を通じて、グローバル人材育成を目指したグローバル化に対応するための指導のあり方を実践研究を通じて明らかにしていくことを目的としている。</p> <p>そのために、「小学校全学年を通じての英語科の実践」、「本校の教育活動における『グローバル化』に対応するための実践」、「『持続可能な社会』を先導する人材の育成に関する取組」の3つの柱を掲げ、実践研究を進めていく。実践研究の第1年次は、先述の3つの柱について、次のようなことに取り組む。</p> <p>【小学校全学年を通じての英語科の実践】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○平成25年度までの研究成果を活用し、第1～6学年のカリキュラム作成を行う。 ○カリキュラム作成にあたっては次の手順で進めていく。 ① 過去の研究誌の他、英訳されている各教科の教科書や先進的な研究資料を収集する。 ② 英語科担当と研究部担当がカリキュラム原案を作成し、全教員から意見を集めて修正する。 ③ 今年度実施したイマージョン授業実施後の考察を記録し、中間まとめと年度まとめを行う。 ④ 研究期間中には小学校英語教育の視察などにより研修を深めカリキュラムの再検討を行う。 <p>※イマージョン教育を推進するに当たり、英語で授業をすることにより内容理解も深まる学習内容を選定するようにする。</p> <p>【既存の教科教育の指導の充実】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○教育の側面から「グローバル化」を規定し、本校職員で概念の共通理解を図る。 ○本校の教育活動の特性を踏まえ、教科教育におけるグローバル化のための人材育成について明らかにするための研修を行う。 ○特に、低学年の社会科、理科においては、なぜ今必要なのかをグローバル化の規定と、教科固有の価値とを関連付けて、明らかにしていく。その際、社会科、理科が廃止された際の背景について十分に留意し、歴史研究や、海外のカリキュラム研究の成果等を参照し、広島大学の研究者の指導も仰ぎながら研究を進めていく。 ○教科ごとに「グローバル化」について研究していく際には、先進的な学術研究、授業づくりに関する資料を集める。
第2年次	<p>【小学校全学年を通じての英語科の実践】</p> <ul style="list-style-type: none"> ① グローバル化の視点を取り入れたカリキュラムを作成し、実施する。 ② カリキュラムの中にeラーニングシステムを活用した指導を位置づける。 ③ 小学校の英語教育を専門分野とする講師を招聘して、その指導助言を受ける。 <p>【既存の教科教育の指導の充実】</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 国語科、社会科、算数科、理科、体育科の5教科において、グローバル化の視点を取り入れたカリキュラムを作成し、実施する。 ② 小学年全学年を通じての社会科、理科を実践する。 ③ 作成にあたっては、「グローバル化」「めざす子ども像」「グローバル化社会を生き抜くため

	<p>の資質・能力」などについて明確にする。</p> <p>④大学より講師を招聘して専門的な指導を受けるとともに、カリキュラム作成についての指導助言を受ける。</p>
第3年次	<p>【小学校全学年を通じての英語科の実践】</p> <p>①「グローバル化の視点を取り入れたカリキュラム」を実践，検証する。</p> <p>②第1～6学年の英語科のカリキュラムにおいて，CLIL単元（内容統合型英語学習）やeラーニングシステムを活用した指導の効果的な位置づけについて，検証し，修正・改善を行う。</p> <p>③外国語教育の充実について取り組んでいる先進校の視察を行い，そこで得られた知見等も参考ににする。</p> <p>④カリキュラムを精査していく際には，大学より講師を招聘して専門的な指導を受けるとともに小学校の英語教育を専門分野とする講師を招聘して，その指導助言を受ける。</p> <p>【既存の教科教育の指導の充実】</p> <p>①国語科，社会科，算数科，理科，体育科，音楽科，造形科の7教科において「グローバル化の視点を取り入れたカリキュラム」を実践し，検証を行う。</p> <p>②各教科における資質・能力を身につけた子どもの姿を明確にし，精査する。</p> <p>③育てたい資質・能力を体系的に育成するための評価について実践研究を進めるとともに，教科の枠をこえて資質・能力を育成する単元を構成し，系統的に配置していく。</p> <p>④カリキュラムを精査していく際には，大学より講師を招聘して専門的な指導を受ける。</p> <p>以上の点について，校内研究における理論研修や全体授業を通じて明らかにしていく。</p>
第4年次	<p>【小学校全学年を通じての英語科の実践】</p> <p>①英語科の各学年の指導目標と，その内容，方法，評価などについて体系化し，カリキュラムとして情報発信する。</p> <p>②カリキュラムを精査していく際には，大学より講師を招聘して専門的な指導を受けるとともに小学校の英語教育を専門分野とする講師を招聘して，その指導助言を受ける。</p> <p>【既存の教科教育の指導の充実】</p> <p>①各教科の各学年の指導目標と，その内容，方法，評価などについて体系化し，カリキュラムとして情報発信する。</p> <p>②カリキュラムを精査していく際には，大学より講師を招聘して専門的な指導を受ける。</p>

（3）評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<p>【小学校全学年を通じての英語科の実践】に関する評価</p> <p>○授業研究における児童の姿等から評価する。 児童の観察や表現物，アンケート，ビデオ映像や記述による発話記録をもとに調査する。</p> <p>【既存の教科教育の指導の充実】及び【持続可能な社会を先導する人材の育成を図る取組】に関する評価</p> <p>○授業研究における児童の姿等から評価する。 児童の観察や表現物，アンケート，ビデオ映像や記述による発話記録をもとに調査する。 （10月末から11月にかけて行う校内研究の授業研究において検証する。）</p> <p>○2月の研究会での発表とその後の本年度の研究についてまとめる段階において，児童の姿や発話記録等から検証を行う。</p>
第2年次	<p>【小学校全学年を通じての英語科の実践】に関する評価</p> <p>①カリキュラムについて，日々の授業における児童の姿等から評価する。 表現物，アンケート，ビデオ映像や記述による発話記録等より検証を行う。</p> <p>②校内授業研究会を7月に実施し，抽出児童の見取り等より検証を行う。</p>

	<p>【既存の教科教育の指導の充実】</p> <p>①各教科のカリキュラムについて、日々の授業研究における児童の姿等から評価する。 児童の観察や表現物、アンケート、ビデオ映像や記述による発話記録をもとに調査する。</p> <p>②国語科，社会科，算数科，理科，体育科の校内授業研究会を，6月から11月に実施し，抽出児童の見取り等より検証を行う。</p> <p>③第1・2学年児童と保護者を対象に，社会科・理科の授業に関するアンケート調査を12月に実施する。</p>
第3年次	<p>【小学校全学年を通じての英語科の実践】に関する評価</p> <p>①授業研究における児童の姿等から評価する。 児童の観察や表現物，アンケート，ビデオ映像や記述による発話記録をもとに調査する。</p> <p>【既存の教科教育の指導の充実】に関する評価</p> <p>①授業研究における児童の姿等から評価する。 児童の観察や表現物，アンケート，ビデオ映像や記述による発話記録をもとに調査する。 教科横断型単元の有効性についても検証を行う。</p> <p>②各教科の授業研究の成果については，その教材のねらいや，育成したい資質・能力との関連を明らかにし，公表する。 なお，第3年次は，これまでに蓄積してきたデータとの比較により仮説について検証する。</p>
第4年次	<p>【小学校全学年を通じての英語科の実践】に関する評価</p> <p>①授業研究における児童の姿等から評価する。 児童の観察や表現物，アンケート，ビデオ映像や記述による発話記録をもとに調査する。</p> <p>【既存の教科教育の指導の充実】に関する評価</p> <p>①授業研究における児童の姿等から評価する。 児童の観察や表現物，アンケート，ビデオ映像や記述による発話記録をもとに調査する。</p> <p>②各教科の授業研究の成果については，その教材のねらいや，育成したい資質・能力との関連を明らかにし，公表する。</p> <p>③グローバル化社会に対応するために，小学校段階で身につけることができる資質・能力が身につけているかどうか検証し，本研究のまとめとする。</p>

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

I. 児童への効果

①小学校全学年を通じての英語科の実施

(ア) 英語を聞いてわかる，話せる，読める，書けるという「できる」感がある児童ほど，英語学習に対して，情意面が高い。

音声面における意識調査では，「先生が話す英語がわかる」「ストーリーが音読できる」「英語の歌が歌える」等と答えた児童は，第3学年以上で，どの学年も90%を超えている。

文字を使用した学習に関する意識調査では，第3・4学年のほぼ全員の児童が「文字を読んだり書いたりする学習を取り入れることはよい」と考えており，第4学年では，小文字をほぼ正確に書くことができる。また，第5・6学年の全児童が「文字を読んだり書いたりする学習を取り入れることはよい」「文字がある方が自信がもてる」と考えており，児童が文字も音声と同様に，コミュニケーションのためであることを自覚している。また，自分の記憶や記録のため，また相手に伝えるわかりやすさを助けるための手段としてのアルファベット文字を，英語コミュニケーションのよりどころとしている。

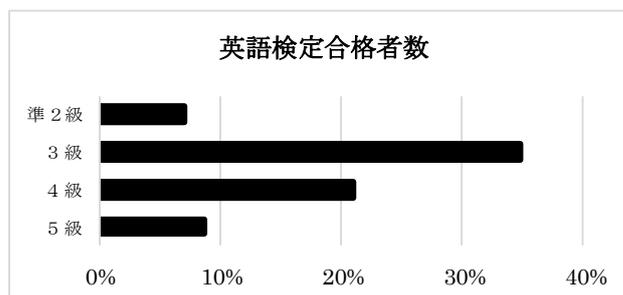
本校では，英語学習2年目にあたる第2学年よりアルファベット文字を使った学習を開始するが，まずは徹底的に音声面での伸長を図り，即興的なやりとりを重視している。その上で，学年の発達段階に応じ

た文字指導の方法を用いて、長い時間をかけて、ゆっくりと慣れ親しませていく方法を今後も継続する。
 (イ) 高学年の児童は、ある程度の英語に触れた段階で、英文作成のルールを明示的に指導すると、自力で英文 (SVO レベル、現在・過去) を産出することが可能である。

高学年の児童を対象に、語順に関する調査を行った。現在の5・6年生においては、ことばの規則性 (語順や品詞など) について3年間の段階的な指導を行った (附属式発達段階的文型指導)。多量のインプットとコミュニケーション活動を大前提とし、帰納的に英文構造の仕組みを整理すると、文法知識やそれを使って自力で英文を産出する力は身に付いてきている。文法的な「気づき」の力を育て、意識させることが可能であると考え。情意面においても、第5・6学年のほとんどの児童は、「文のきまりについて勉強することはよい」と考えている。

(ウ) 小学校3年生以上の児童のうち、英語検定3級 (本校の指導目標 CEFR A1-3 程度) 達成児童は約4割、また同等の力をもつと推測される児童も合わせると、5割である。

3年生以上の児童に英語検定受検と合格率について調査を行った (図1)。学校で英語を学習するだけではなく、家庭で授業で学んだストーリーの音読を家族に聞いてもらったり、英語に関わるテレビやラジオ番組を継続して視聴したりしている児童が多くいる。高学年になるほど、資格試験を積極的に受検し、できることが自信となっている。情意面での向上につながることから、自律的学習者を育てる為に、外部試験対策として、家庭学習や宿題は欠かすことができないと考える。



【図1 3年生以上の英語検定の合格率】

②既存の教科指導の充実

ここでは、第1学年から実施している社会科と理科について整理する。第1・2学年児童を対象に、社会科と理科に関するアンケート調査を実施した。アンケート項目の、「社会科・理科のじゅぎょうは楽しいですか」と「社会科・理科を学習してよかったですか」を中心に、第1年次と第4年次を整理すると、次のことがわかった (表4)。

(表4) 社会科、理科のアンケート

	第1学年		第2学年	
	平成26年度	平成29年度	平成26年度	平成29年度
社会科・理科のじゅぎょうは楽しいか	楽しい…84% まあまあ楽しい…14%	楽しい…84% まあまあ楽しい…16%	楽しい…82% まあまあ楽しい…18%	楽しい…84% まあまあ楽しい…14%
社会科・理科を学習してよかったですか	よかった…91% まあまあよかった…9%	よかった…93% まあまあよかった…7%	よかった…92% まあまあよかった…8%	よかった…95% まあまあよかった…3%

第1年次、第4年次では、第1・2学年ともに「社会科・理科のじゅぎょうは楽しいですか」に楽しいと答えている人数は、82~84% (63名中52名~53名) で、ほとんどの子どもたちが楽しいと感じている。楽しいと感じる主な理由としては、「社会科は、探検にでかけて調べることができるから楽しい。」や「理科は朝顔を育てたり、観察したりすることが楽しい。」と答えていた。第1・2学年の子どもたちにとっては、楽しい学習となったことがわかる。

また、第1年次、第4年次では、第1・2学年ともに「社会科・理科を学習してよかったですか」によかったと答えている人数は、91%以上 (63名中57名以上) である。「まあまあよかった」と答えている人数を足すと、ほぼ100%に近くなる。ほとんど全員が、社会科・理科の学習を有意義と感じている。主な理由としては、「社会科で学習したピクトグラムや交通標識を、つつい見ようになりました。役に立っていると思います。」や「理科は、昆虫がいままであまり得意ではなかったけど、学習すると昆虫が好きな生き物になってきました。」のように、実際の生活で学んだことを使おうとしたり、自分自身の成長を感じたりすることができるようになっていた。

なお、社会科のパフォーマンス評価では「最初は、保健室に注射器があると思いました。でも、保健の先生に聞いてみると、保健室は病院ではないことがわかったよ。だから、保健室には注射器はありませんでした」と記している子どもがいた。自分の身近にいる人が、どんな仕事をしているのかより深く知ることにより、人の働きによって社会が形成されていることに気付いていくきっかけとなった。同じく、理科のパフォーマンス評価では、あさがおの種を「みかんの（房の）ようなかたちだから」「黒や茶色の色だから」というように、観察の視点を明らかにして、主張の根拠を述べるができるようになってきていて、科学の本質として学習したことを活用できるようになっている。

II. 教員への効果

校内授業研究は、全教員が参加できるように年間計画できちんと時間を確保した。カリキュラムを子どもの学びの視点からとらえ、「教科の枠をこえた資質・能力の育成」等、共通のテーマをもって授業に取り組んだり、子どもの学びの姿から授業討議をしたりしたことが、全教員が共通の視点で指導を考える良い機会となった。授業参観者の授業及び単元、カリキュラムに関する意見・感想の中で、資質・能力の見取り、指導方法の改善等について以下のような気づきが得られた。

- ・前時と比べ、発言者が増え、その内容も結果を科学的な証拠として検討する「考察」になっていました。また「考察」が理解できていない児童も、他の児童の発言を聴きながら、おぼろげながらも「結果」と「考察」の違いがわかりつつある段階であると思います。（資質・能力の見取り）
- ・最初から万全に準備された発問や支援の手立てのみを用いるのではなく、Trial and Error で常に見直しや修正を図りながら、子ども達に目的や場面や状況に応じて外国語を使用させることを心がけたいと思います。今後とも、問題解決のプロセスを丁寧にたどる授業を大切にしていきたいと考えます。（指導方法の改善等）

III. 保護者への効果

第1・2学年児童保護者を対象に、社会科と理科に関するアンケート調査を実施した。アンケート結果、内容は次の通りである。

平成29年度の第2学年保護者は、90%（53名）が「有意義・まあまあ有意義」と回答していた。第1学年時からの実践を経て、全体的には低学年社会科・理科を「有意義」と考えている保護者が多いことを示している。また、今年度（平成29年度）の第1学年児童の保護者は、「有意義・まあまあ有意義」だと考えている割合が97%（59名）と多い。調査初年度（平成26年度）の第1学年の保護者は70%（45名）が有意義と答えていたのに対し、今年度は、89%（54名）の保護者が有意義と回答しており、低学年社会科・理科を肯定的にとらえる保護者の割合が増えている。

「有意義」と答えた保護者は、「身の回りの社会の事に興味を持つようになって、学習したことをもとに、他の事にも注意が向くようになった。実験などを通して研究の基礎を学び、物事に対して自分なりの意見を持つことができるようになった。」など子どもの姿の変容をもとにした理由や、「身の回りのことを深く掘り下げたことが社会科、理科につながると思う。低学年でも無理なく身に付けられる学習なので、これから高学年に向けて学習するにも有意義だと思う。」と肯定的にとらえている。「あまり有意義ではない」と回答している保護者は、「低学年のうちは心身の発達も未熟なので、教科によっては偏った考えにつながる。」という意見もあった。また、「生活科との比較が難しいので、回答できない。」という意見もあった。

（2）実施上の問題点と今後の課題

以上の取組をふまえて、現時点で明らかになっている問題点と今後の課題は次の2点である。

- これまで、パフォーマンス評価やポートフォリオ評価を行ってきた。しかし、子ども達にとって問題がリアルな文脈になっていなかったり、資質・能力をどのように身に付けているか十分に見取れなかったりした。今後も評価の検討を続け、カリキュラムの改善に反映させる必要がある。
- グローバル人材育成に寄与するカリキュラムを各教科（国語科、社会科、算数科、理科、音楽科、造形科、体育科、英語科）で開発した。このカリキュラムをもとに、実践を行ってきたが、6年間

を見通したカリキュラムの成果や課題を得るには十分な期間とは言えない。そこで、本カリキュラムについて、さらにマネジメントをしていく必要がある。

広島大学附属小学校 教育課程表（平成29年度）

	各教科の授業時数									道徳	外国語活動	特別活動	総合的 学習の 時間	新設 教科 英語科	総 授業 時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画 工作	家庭	体育						
第1学年	238	68	136	68	0	51	68		85	34		34		68	850
	-68	+68		+68	-102	-17			-17					+68	(0)
第2学年	245	70	175	70	0	52	70		88	35		35		70	910
	-70	+70		+70	-105	-18			-17					+70	(0)
第3学年	245	70	175	87		53	52		88	35		35	35	70	945
				-3		-7	-8		-17				-35	+70	(0)
第4学年	245	87	175	105		52	53		88	35		35	35	70	980
		-3				-8	-7		-17				-35	+70	(0)
第5学年	175	100	175	105		50	50	60	90	35	0	35	35	70	980
											-35		-35	+70	(0)
第6学年	175	105	175	105		50	50	55	90	35	0	35	35	70	980
											-35		-35	+70	(0)
計	1323	500	1011	540	0	308	343	115	529	209	0	209	140	418	5645
	-138	+135		+135	-207	-50	-15		-68		-70		-140	+418	(0)

学校等の概要

1 学校名, 校長名

広島大学附属小学校 (ヒロシマダイガクフゾクショウガッコウ)

深澤 広明 (フカザワ ヒロアキ)

2 所在地, 電話番号, FAX番号

広島県広島市南区翠一丁目1番1号

TEL (082) 251-9882 (代表) FAX (082) 251-0196

3 学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数, 学級数

(小学校の場合) H29年12月1日現在

第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		第6学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数										
63	2	63	2	63	2	63	2	64	2	62	2	378	12

(中学校の場合)

第1学年		第2学年		第3学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数

(高等学校の場合)

課程	学科	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	〇〇科										
	××科										
	計										
定時制	△△科										
計											

4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭	講師
1	1		1		15		1		1	5
ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	計						
2	1	3	1	32						